

【研究ノート】

『松江竹枝』の作者篠田謙治について

－その履歴と『山陰新聞』所載の漢詩－

要木純一

（島根大学法文学部）

キーワード：松江竹枝、篠田謙治、精軒、遊廓、明治初期

1. 調査現況

島根大学附属図書館蔵（2006年購入。要木研究室配置）の『松江竹枝』（精軒痴史著 大森惟中評 1888）は、これまで知られていなかった漢詩集（手稿本）である。明治初期の松江の遊里を中心とした風俗を描いた、貴重で興味深い作品が収められている。妓女たちの名前と境涯が附されているが、この詩集無くしては、苦界に落ちた彼女たちの記録は残らなかったであろう。全国に知れ渡る前の安来節にも触れている。評点をつけた大森惟中（1844－1908）は、明治期、日本の美術工芸発展に貢献した、学者・官吏として著名。フェノロサ『美術真説』の訳者でもある。この大森惟中の評言もまたおもしろい。

当の作者の精軒痴史が何者であるかは、長らく分からなかった。詩の内容から、東京近辺の出身で、松江に数年間滞在したのであろうと推測するのみであった。このたび、当時の『山陰新聞』（山陰新聞社 1882創刊）に、この詩集に収められたのと同じ詩を多数発見するに及び、精軒痴史が篠田謙治という人であることが判明した。その経緯について報告する。

なお、『松江竹枝』に関して、私は、これまで、作者を明らかに出来ないまま、『松江竹枝』について 附翻刻 「島大國文」(32) [2008] pp.129～142
『松江竹枝』訳注（一） 「島大言語文化」(25) [2008] pp.1～25
を著している。

2. 『松江竹枝』の著者－篠田謙治

『山陰新聞』における精軒痴史＝篠田謙治の作品や記事については、後に詳しく述べるとして、彼は当時ある程度知られていた人物であつたらしい。明治時代の人名辞典にその紹介があるので、書き写しておく。（『明治人名辞典Ⅱ』 下巻 1988年7月15日 日本図書センター発行。底本は、日本現今人名辞典発行所 編・刊『日本現今人名辞典』 明治33（1900）年）読みやすいように、句読点等を改めた。

●しのだ、うんぼう 篠田雲峰

君は旧幕士なり。名は謙治。字は士貞。雲峰は其号。別に小竹園の号あり。元治元年一月十五日江戸に生る。幼より芳野金陵、阪谷朗廬に就きて、漢学を学び、又和学を修む。其他法律経済の二科を講究し、頗る造詣する所あり。歳十八職を大蔵省に奉じ、編輯に従事し、幾く

もなく職を辞す。君尤も詠歌に長ず。曾て鈴木重嶺翁の眷顧を受け自得する所多し。

これ以外に彼の生涯をうかがえるまとまった史料がないのだが（特に没年は不明のまま）、鳥根県に出向した大蔵省の役人だったのではないかと当たりをつけて、官員録や職員録のたぐいをいくつか調べてみると、たとえば、鳥根県立図書館蔵『嶋根県職員録』（明治17年8月20日改正 明治17年9月出版 出版人 鶴村栄七 発兌書林 川岡清助）の複印本、13、14頁には、「収税属」の項があり、その14頁に「十七等官相当」として「篠田謙治 東京府士族」とあった。更に、国立国会図書館近代デジタルライブラリーの『改正官員録』（彦根正三編 博公書院 明17-26）を閲すると、明治17年下（地方庁之部）10月より19年5月下まで、「鳥根県」「収税属」の「十七等官相当」に「東京 篠田謙治」と名を連ねている。官員発令日と官員録発行日との対応は詳らかにせぬが、ほぼこの2年半に渡って、鳥根に赴任していたことがわかる。この期間の前後に、『明治人名辞典Ⅱ』の「歳十八職を大蔵省に奉じ、編輯に従事し、幾くもなく職を辞す」という記述に該当するような、官職についていたか、一通り調べてみたが、未だ彼の名を見出せない。（従って同姓同名の別人である可能性を完全につぶしていない点遺憾である。なお、官員録や職員録の調査については、鳥根大学法文学部廣嶋清志教授、竹永三男教授のアドバイスを得た。記して謝意を示す）

篠田謙治の役人としての事跡はこの程度にしか追えなかった。文学関係では、先の『明治人名辞典』には、「芳野金陵、阪谷朗廬に就きて、漢学を学」んだとある。芳野金陵、阪谷朗廬は幕末、明治初めの漢学者、漢詩人であり、彼らの主立った詩集を繰ってみたが、恐らく幼年の弟子に過ぎなかったからであろうか、篠田謙治や精軒等の名は出てこなかった。

実は、篠田謙治は、漢詩人としてよりは、むしろ、「和学を修」め、「尤も詠歌に長ず」とあるように、歌人として活躍したようで、明治初期の歌人鈴木重嶺の門人として、当時の新聞にその名が散見する。例えば、『読売新聞』（『明治・大正・昭和の読売新聞（読売新聞社CD-ROM）』による）の以下の記事。

●1898（明治31）年12月3日『読売新聞』朝刊、4面

故鈴木重嶺翁逸話（三）

翁が歌の師の村上素行なるよしハ前にも記せしが、素行ハ田安家に仕へて加茂真淵の学統を引く。又、伊庭秀堅にも従ひたり。

翁の門人数百人全国に散在すれども、歌道不振の時節とて歌にて門戸を張る程のものハ少く、多くハ斯道に遊べる老人抔なれども、中に就て名を知られたるハ屋代柳漁、小腴景德の二人なり。然れども皆翁に先ちて逝けり。重嶺社中にて名を知らるゝ者にハ先光清風あり。又、歌の門人に富みたる者としてハ篠田謙治あり。幹事にして最も古きを山田謙益とす。（以下略）

この記事は独力で見つけ出したのではなく、深沢秋男昭和女子大学名誉教授・菊池眞一甲南女子大学教授等のホームページ『近世初期文芸研究会』「鈴木重嶺関係資料」⁽¹⁾（深沢氏担当部分）で知った。この情報なくしては、篠田謙治の辞官後の動静は分からなかった。記して感謝の意を示したい。鈴木重嶺（1814-1898）は、明治初期の和歌の大家で、これまた、「鈴木重嶺関係資料」から引用させて頂けば、

●鈴木重嶺〔すずき しげね〕

徳川幕府に仕え、最後の佐渡奉行となる。明治11年、職を辞し、東京で鶯蛙吟社を組織し、月並歌会を催し、短歌雑誌『詞林』を主催した。佐佐木信綱と共に明治初期歌壇の名家とみなされていた。『詞林』は後に、佐佐木信綱の『心の華』に合併した。⁽²⁾

という人である。鈴木重嶺の資料は、昭和女子大学図書館に「翠園文庫」として所蔵されている。この文庫や当時の和歌雑誌や新聞和歌欄には、まだまだ篠田謙治に関する情報が存在することであろう。今後精査に努めたい。

なお、『近世初期文芸研究会』「鈴木重嶺関係資料」の鈴木重嶺（翠園）関係資料紹介（5）⁽³⁾には、全龍寺所蔵重嶺関係資料として、『故鈴木重嶺翁 追悼歌会供薦歌』が深沢秋男氏によって報告されており、その詠者氏名のなかに篠田謙治の名が連なっている。

3. 『松江竹枝』翻刻と校勘

『島大國文』の前期論文で附録にしたのだが、以後の論のために、ここで、再び『松江竹枝』の翻刻を掲げることをお許し頂きたい。今回は、どの詩が『山陰新聞』に見えるか、また文字の異同等があるかを各首の後に「*校」として附記した。番号は引用に便ならしめるために振ったもの。《山・松》等の略称は、後に引く当該文の初めに注記している。大森惟中の評の部分は、【眉批】、【評】で示した部分である。【改】は大森惟中の修改した部分である。旧字、異体字、修改部分など、原文を髣髴させるように翻字をするのはなかなか難しかった。細かな点は、やがて公表する予定の写真で確かめていただきたい。この書自体の略称は《松》とする。

●【表紙左上】

松江竹枝 五十二首
長歌一首

【本文】

松江竹枝 原一百五十首

精軒癡史草

絃歌声湧水之涯。花満高樓月満街。多少遊人来集此。碧雲湖上小秦淮。（1）

松江湖、一名碧雲湖。

*校 《山・松》【1】。マイクロフィルムでは「此」字と結句缺。

垂楊垂柳澹烟遮。髣髴絃声蘇小家。好是湘簾春不捲。滿江絲雨酒旗斜。（2）

*校 《山・松》【2】と思われる（根拠は後述）が全句缺。／《琴》【1】。

樓上筵取歌管少。朦朧烟月懸櫻杪。彪兕吠影夜將闌。悄悄隔花人語小。（3）

【眉批】青邱遺韻。小字押得湊巧。

【批】花陰撼幌、不怪彪也一吠。彪亦道個畜生。

*校 《山・松》【3】と思われる（根拠は後述）が全句缺。

落花撩亂多於雨。漠々陰陰籠繡戶。睡起春人情尚慵。低絃試按梨園譜。（4）

*校 《山・松》【4】。「戸」「睡起春人情尚」「譜」以外缺。

一簇烟霞香靄間。紅雲欲墜午風閒。青樓唱出安來曲。社日櫻花砥上山。（5）

全詩用俚歌語。○曲名云安来（ヤスキ）節。○砥上山有安来。○砥上山別書十神山。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

社日桜花簇綺羅。十神山上景光多。青樓置酒能留客。例唱安来謠冶歌。(6)

*校 《山・竹》【4】。

隔簾咲語尚喃喃。姊妹三更眼未緘。知有明朝看花約。灯前相倚製春衫。(7)

*校 《山・松》【6】。

恰是冰魚味美時。扁舟載妓漾漣漪。晚來停棹何辺好。神女祠前月如眉。(8)

氷魚、松江名産。○松江湖山有辨天祠。

【評】女能蕩舟、眉能伐性、可畏、可畏。

*校 《山・松》【5】承句缺。結句の「神女祠前」缺。「月如眉」を「月似眉」に作る。／《琴》

【2】も「月如眉」を「月似眉」に作る。「月似眉」の方が平仄は合う。

江天無月夜冥々。烟火趁涼轟迅霆。忽地闌然人喝采。一丸碎作滿空星。(9)

【改】忽→忽

【眉批】無月冥夜、反襯滿空星、巧甚。誦至末句、亦絶叫喝采。

【評】霆是鍵屋、丸是玉屋。

*校 《山・松》【12】。承句「忽」は大森惟中の改めたように「忽」に作る。

月色滿城風露滋。踏歌声湧夜闌時。尋常詞曲厭陳腐。争唱安来新竹枝。(10)

安来、地名。

【評】結似第六首。改案為可。

*校 《山・松》【18】。承句「湧」は「裏」に作る。／《琴》【3】承句「古詞旧曲嫌陳腐」に作る。

愁思引客倚青樓。月冷庭梧暗露浮。拳首悽然低首泣。三年此地值中秋。(11)

*校 《山・竹》【1】。

長天漠々水悠悠。暮北朝南一葉舟。今夜阿郎何处宿。白蘋紅蓼滿湖秋。(12)

【眉批】古調澹蕩。

*校 《山・松》【19】。

松江好景属輕鳧。浅水蘆花活画圖。今時無復季鷹興。惆悵秋風湖上鱸。(13)

鱸魚、松江名産。

【評】披活画、捉活花、何為張翰婦思。

*校 《山・松》【20】。自注なし。

阿嬢迎客送新居。玉碗盛來開宴初。笑道僻郷珍味少。松江名物便鱸魚。(14)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

阿爺曾化薩山霜。慈母三年在病床。心事告君々憫否。半生流落滯斯郷。(15)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

匆卒微姬々未來。悄然無復笑顏開。阿嬢慣客能解事。柑子一盤先侑杯。(16)

土俗呼妓為姬。

【改】阿嬢慣客能解事→阿嬢解事善嬌客

【「解」字に対して】失声

【評】真個可憐、不煩拍手再々。

*校 《山・松》【14】。起句「匆卒微姫猶未来」。承句、「笑」字缺。自注なし。
戸隙風寒未出幃。鴛鴦被底笑相依。多情最是今朝雪。留得阿郎不放婦。(17)

【評】定是濃茶的熱契。

*校 《山・松》【22】。

絃歌声絶夜方央。醉步蹒跚欲下廊。織手挽衣何所說。請看樓外万瓠霜。(18)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

雨絲風片暗江城。滑々泥途不可行。知是遠村先有雪。街頭処々売山鯨。(19)

*校 《山・松》【21】。自注(山鯨猪俗称)。／《琴》【4】承句「遠」を「辺」に作る。
街上人呼河洛行。竈頭沸々煖煙生。硝燈影白往来断。風鐸霜寒夜半声。(20)

【改】河洛→河漏

【評】賤商入詩、才思沸々。

*校 《山・松》【23】。承句「煙」を「烟」に作る。自注(河洛蕎麦□一名)。
絃管筵取伴後房。癡情擬学兩鴛鴦。朱唇先試相思草。分与餘煙笑厲郎。(21)

【評】初会情致如觀、不知当夜烟量如何。

*校 《山・松》【16】。結句「与」を「得」に作る。自注(相思草烟草別名)。
瓷碗陶杯漫献酬。俗人何解愛嬌喉。此間尤厭殺風景。醉漢頻争豁指頭。(22)

【眉批】争豁改挑拇如何。

*校 《山・松》【15】。起句「碗」を「椀」に作る。自注(豁指頭拇戰一名)。
香夢驚醒客下楼。佳人相送說離愁。低声更就耳边語。果是明宵能到不。(23)

*校 《山・松》【17】。起句「鴛枕夢醒客下楼」に作る。

昨夜灯前約偕老。無端好夢至巫山。朝来頻被同儕艶。織指新穿瑪瑙環。(24)

瑪瑙、松江物産。

【眉批】実況実叙

*校 《山・松》【9】。承句「好」字缺。自注なし。
傷郎至竟憶郎情。只願莫違三世盟。私語未終天欲曉。生憎善導寺鐘声。(25)

善導寺、松江寺院之名

*校 《山・竹》【9】。自注なし。

咏声妓 原六十首

茂春(シケハル) 景山春女 伯州之産

自註 角盤山在伯耆○春女曾与良人不適、竟棄兒而去焉。余不詳其假真。
鐘情昨弄掌中珠。一去当年思到無。夜半頻啼呼子鳥。角盤山上月痕孤。(26)

【改】鐘→鍾

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

好（ヨシ） 山根与志女

唱出嬌喉艶冶歌。評声品色果如何。名呼好好連呼耳。司馬先生到處多。(27)

【眉批】司馬作水鑑如何。

*校 《山・綿》【5】（与志）。妓女の本名を示す自注はなし。以下同様。

婀娜纖腰擊者誰。閨情宴樂兩相宜。縱饒弱柳無任俠。畢竟東風逗此枝。(28)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

愛次 田原猶女 大阪之産

昨夜海棠微雨過。一顰一笑意如何。沈淪情況君休説。自古佳人薄命多。(29)

*校 《山・綿》【8】（愛次）。／《莊二》に相寿という妓女を詠む。同一人物か。

花梅（ハナムメ） 中山阿照

夜々劉郎踏雪來。狹斜場枕碧江隈。清香艷色有人識。臘裏占春花是梅。(30)

*校 《山・綿》【10】（花梅）。／花梅は《莊一》にも詠む。

朝霧（アサキリ） 松江阿千代

朝霧時病眼、故及。

三生石上結良縁。互約後宵契已堅。咫尺情郎看不見。朦朧朝霧罩簾前。(31)

【眉批】宛然須磨卷光景。

*校 《山・竹》【13】朝霧。／朝霧は浅桐として《莊二》にも詠む。

花扇（ハナアフキ） 太田阿満 松江藩士女

繡閣談諧逸興多。唱來一曲八杉歌。芳心持贈画花扇。不是情人可奈何。(32)

【評】扇上所画、無乃朝顔花

*校 《山・綿》【2】（花扇）。

玉鶴（タマツル） 安龍寺阿常

九天高舞意悠々。一曲清歌弄玉喉。仙客騎遊何處是。碧雲湖上小揚州。(33)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。松江竹枝詞（佐川半醒）に玉鶴を詠むがあるいは同一人物か。

初君（ハツキミ） 糸賀阿末

千紅万紫本紛々。一片芳心初見君。今夜情郎猶未到。花傷風雨月傷雲。(34)

*校 《山・綿》【6】（初君）。起句は「数行紅涙是斯文」に作る。承句「芳」は「丹」に作る。／初君は《莊二》にも詠む。

竹（タケ）子 垣本阿品 舞妓

敲鼓淵飄舞裙。風狂雨劇耐辛勤。看他紅紫紛紜裏。瀟洒清姿抽此君。(35)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

小升 山本充女

鬱居十載獨傷神。夜々巫山入夢頻。未語真情我先識。性來矜重屬斯人。(36)

【評】矜重傷神人、宜傾小升酒、一掃鬱愁。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

市吉（イチヨシ） 川上唯女 出雲杵築之産

自註 市吉曾与画工金山鷗隣互約伉儷、情交親密、故及。

一日不看奈病癘。宵宵只有苦中娛。阿郎舐筆画何状。写出鴛鴦比翼圓。(37)

【改】圓→圖

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。／《莊二》に市由という妓女を詠む。同一人物か。

絲児 (イトジ)

朱唇舐筆写相思。餘墨又描新月眉。児繫色絲牽万客。絲児真箇是情児。(38)

【改】児繫色絲→嬌態纏綿

【評】蜘蛛女怪、応避三舎。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。／《莊一》に糸治という妓女を詠む。同一人物か。

綾子 広部瀧女

自註 以古川柳為一篇

阿爺一去奈慈親。菽水頼愁逼赤貧。恨殺佳人多薄命。綾羅綿繡却纏身。(39)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

亀二 舟引充女

奇遇一宵話情状。蓬萊夢穩閨幃帳。假将其類作相求。果是阿郎名六蔵。(40)

【評】六蔵不是矢口渡恋阿舟人。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

歌吉 (ウタキチ) 佐々木歌女

花柳場中寄此身。清歌妙舞不同倫。請看浮薄狹斜裏。能解人情有幾人。(41)

【眉批】真詣悟機。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。／歌吉は「松江竹枝詞」(佐川半醒)に詠む。

愛吉 (アイキチ)

自註 愛吉醜顔、媚靨可愛。○転絃用俚歌語。

嬌靨醜顔笑勸觴。早収絃子入蘭房。似他情味大和柿。一啖香甜不可忘。(42)

【改】絃→結

【評】熟柿紫爛、須戒放啖。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。／《莊一》にも愛吉を詠む。

富 (トミ) 子 長澤阿辰 浪花之産

自註 富子幼来松江、夙有才色之名、傍能裁縫、転結故及。

此地数年猶未帰。宵々紅淚漂閨幃。憐君青女繡秋手。好為阿郎縫錦衣。(43)

*校 《山・竹》【12】富子。「富子。浪華之産。幼来松江。夙有才色之名。傍能裁縫。転結故及。」

と、ほぼ同文の後注有り。

又

富子之情人、偶在藝州、故及。○巖島在藝州。

楼上夢驚蜀女魂。杜鵑泣血欲黄昏。阿郎今夜何辺在。巖嶋祠前月一痕。(44)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

力長 (リキチャウ) 比企阿充 松江藩士女

自註 七年流落、力長自語人者。○阿充為父母鬻技者。

桑滄之變獨空傷。只喜双親猶在堂。至孝佳人天未幸。七年流落滯斯鄉。(45)

*校 《山・綿》【1】(力蝶)。

鶴(ツル)子 増田於初

越王樓閣唱吳謳。声似九臯弄玉喉。一自此君留此地。人間此処小楊州。(46)

【眉批】与玉鶴同趣。要改作。

*校 《山・綿》【7】(鶴子)。承句「似」を「不」に作る。恐らく誤り。

素絲(シライト) 増田宇能女

皓齒明眸傷此身。落花流水奈前因。素絲一縷長千尺。繫得橋南橋北人。(47)

*校 《山・綿》【3】(素絲)(素一作白)。

小蝶(コテウ)

花間比翼結春盟。想起東西別後情。舞翅翩々一何重。娥眉顰蹙露無声。(48)

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

若柳(ワカヤキ)

葉如嗶眼含濃露。絲似愁腸遮澹烟。濯々香薰春月柳。多情顧影自相憐。(49)

【改】「嗶」字の旁が「虎」であったのを正す。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

若梅(ワカウメ)

素服淡粧纏此身。孤清潔白白無塵。春風未入趙郎夢。能耐雪霜有幾人。(50)

【評】淡粧孤潔。恐是老梅、非若梅。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

駒吉(コマキチ) 片山阿国

三年斯地寄斯軀。拳首長鳴低首吁。一顧未曾逢伯樂。同槽伏櫪奈龍駒。(51)

【改】「軀」字の旁が「巳」であったのを正す

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

附録

代某女寄阿郎 長歌

嘗泛墨水月、々下初相逢。嘗伴東台花、々底情話濃。花月為媒介、遂得持巾櫛。々々取周歲、情交日親密。花月復促別、一朝值苦離。々杯和淚酌、陽関曲声悲。忍難忍之情、割難割之愛。江頭解纜去、心腸為欲碎。咫尺亦復関、況是隔商參。々々仮令隔、不隔妾衷心。尊貌宛在目、何日又相見。朝昏拜攝影、旦暮俟魚厂。々々有報艷陽天、嫦娥好結花姻縁。觀月悽然觀花泣、夜々朦朧月如煙。(52)

【改】遂得持巾櫛→遂得侍巾櫛

【改】々々取周歲→々々執周歲

【改】忍難忍之情、割難割之愛→忍他難忍情、割此難割愛

【改】 咫尺亦復関、況是隔商参→翹企不可望、天涯隔商参

【改】 夜々朦朧月如煙→花色暗澹月如煙

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。東京での作であろう。

失題写昔人夢境 原十五首

酒渴眠醒合歡被。美人分与銀杯水。釵尖帽角影交叉。月上梅窓香霧裏。(53)

【眉批】 西廂余響

【評】 窓間偷覩月娥、梅妃恐不勝妬嗔。

*校 『山陰新聞』にこの詩なし。

【大森惟中の跋】 明治戊子十二月大尽前二日 解谷樵史大森惟中妄評多罪

『松江竹枝』所収の、全53首のうち、私の数え方では、31首が、『山陰新聞』に載せられている。次に『山陰新聞』にどのように載っているか見てみよう。

4. 『山陰新聞』等所収の『松江竹枝』

『山陰新聞』は、島根大学図書館所蔵の山陰新聞[マイクロフィルム] (日本マイクロ写真発行) に依った。この際、

『山陰新聞文芸記事総覧』明治15年-大正元年 / 寺本喜徳島根女子短期大学名誉教授編. - 松江 : 島根県立島根女子短期大学国語国文学会 1999.2.

が大変に役立った。『山陰新聞』の文芸記事の標題や著者を逐一時系列で並べて索引を附したものの。大変な労作で、明治期の山陰の文学状況を知るためには、まずこの書に当たらなくてはならない。漢詩を含めた文芸記事を完璧に網羅したこの書によって、見落としを正すことが出来た。ここに謝意を表したい。

『松江竹枝』と同じ詩があらわれるのは、3カ所であるが、その最初は、以下のものである。2首が欠けているが、全23首のうち18首が『松江竹枝』と重なっていると思われる。但し、著者名が篠田謙治ではないことが大問題である。

A 1985 (明治18) 年 3月17日 『山陰新聞』

松江竹枝 (二十三首之中) 村上琴屋 *略称:《山・松》

【1】 絃歌声湧水之涯。花満高楼月満街。多少遊人来集此 □□□□□□

*校 《松》(1)。結句「碧雲湖上小秦淮」。

【2】 □□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。*缺

*校 全文缺。恐らく《松》(2)。/従って《琴》【1】。

【3】 □□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。*缺

*校 全文缺。恐らく《松》(3)。

【4】 □□□□□□。□□□□□□戸。睡起春人情尚□。□□□□□□譜。

*《松》(4)。「落花撩乱多於雨。漠漠輕陰籠繡戸。睡起春人情尚慵。低絃試按梨園譜。」

【5】 □□□□□□。扁舟載妓漾漣漪。晚来停棹何辺好。□□□□月似眉。

*《松》(8)。起句「恰是冰魚味美時」。結句「神女祠前月如眉」。/《琴》【2】。

【6】 隔簾咲語尚喃喃。姊妹三更眼未緘。知有明朝看花約。燈前相倚製春衫。

* 《松》(7)。

【7】 釵光鬢影乱紛々。寺々東風麝氣薰。女伴争来賽香火。仏辺笑語弄春分。

* 《松》なし。

【8】 楼外風光映醉顔。桃花春水夕陽間。大仙峯落杯中雪。道是松江小富山。

* 《松》なし。

【9】 昨夜燈前約偕老。無端□夢至巫山。朝来頻被同儕艶。織指新穿瑪瑙環。

* 《松》(24)。承句「無端好夢至巫山」。自注として「瑪瑙、松江物産」。

【10】 欲語衆中不自由。滿腔空貯別来愁。更期今夜相逢処。菅相祠前招鶴楼。

* 《松》なし。

【11】 滿地炎塵日未頽。花茶坊裏雪成堆。紅粧一笑迎客説。昨自大仙山上来。(花茶坊見夢梁録)

* 《松》なし。

【12】 江天無月夜冥々。烟火趁涼轟迅霆。忽地闐然人喝采。一丸碎作滿空星。

* 《松》(9)。転句「忽地闐然人喝采」

【13】 菅相祠辺夜色明。衣香扇影□縦横。紅裙時伴美髯過。時様金鈿鏤水晶。

* 《松》なし。

【14】 匆卒微姫猶未来。悄然無復笑顔開。阿嬢慣客能解事。柑子一盤先侑杯。

* 《松》(16)。起句「匆卒微姫々未来」。自注として「土俗呼妓為姫」。

【15】 蓋椀陶杯漫獻酬。俗人何解愛嬌喉。此間最厭殺風景。醉漢頻争豁指頭。(豁指頭拇戰一名)

* 《松》(22)。起句「椀」を「碗」に作る。承句「此間尤厭殺風景」。自注なし。

【16】 絃管筵叙伴後房。癡情擬學兩鴛鴦。朱唇先試相思草。分得餘烟笑属郎。(相思草烟草一名)

* 《松》(21)。結句「分与餘煙笑属郎」。自注なし。

【17】 鶯枕夢醒客下楼。佳人相送説離愁。低声更就耳辺語。果是明宵能到不。

* 《松》(23)。起句「香夢驚醒客下楼」。

【18】 月色滿城風露滋。踏歌声裏夜闌時。尋常詞曲厭陳腐。争唱安来新竹枝。

* 《松》(10)。承句「踏歌声湧夜闌時」。／《琴》【3】 転句「古詞旧曲嫌陳腐」。

【19】 長天漠々水悠々。暮北朝南一葉舟。今夜阿郎何処宿。白蘋紅蓼滿湖秋。

* 《松》(12)。

【20】 松江好景属輕鳧。浅水蘆花活画圖。今時無復季鷹興。惆悵秋風湖上鱸。

* 《松》(13)。自注として「鱸魚、松江名産」。

【21】 雨絲風片暗江城。滑々泥途不可行。知是遠村先有雪。街頭処々売山鯨。(山鯨猪俗称)

* 《松》(19)。自注なし。／《琴》【4】。転句「知是辺村先有雪」。自注なし。

【22】 戸隙風寒未出幃。鴛鴦被底笑相依。多情最是今朝雪。留得阿郎不放帰。

* 《松》(17)。

【23】 街上人呼河洛行。竈頭沸々煖烟生。硝燈影白往来断。風鐸霜寒夜半声。(河洛蕎麦□一名)

* 《松》(20)。自注なし。

作者ということになっている村上琴屋は、島根県出身の著名な漢詩人である。『島根県歴史人物事典』(平成9年11月25日 山陰中央新報社)の記述を引用する。

●村上琴屋（むらかみ きんおく）

文久元年（一八六一）～昭和七年（一九三二）

漢詩人、鳥根県官吏、剪淞吟社社長

本名寿夫。明治一三年（一八八〇）松江中学卒。漢学を旧松江藩士平賀静遠に学び、後雨森精翁門下。漢詩結社剪淞吟社創立者の一人で社長もつとめたが、新潟・滋賀・岡山各県に赴任、松江に住むことは少なかった。晩年旧松江藩主松平家の家令となり、東京で没。（以下略）（石破洋元鳥根県立女子短期大学教授担当）

村上琴屋の死後編まれた『琴屋詩存』にも、これらの詩のうち、四首が選ばれている。

A' 『琴屋詩存』（1938（昭和13）年3月 著者 村上寿夫 発行者 村上巖男）巻上

松江四時雜詞 原二十三首 *略称：《琴》

【1】垂楊垂柳澹烟遮。髣髴絃声蘇小家。好是湘簾春不捲。滿江絲雨酒旗斜。

*《松》（2）。／《山・松》【2】缺のところか。

【2】恰是水魚味美時。扁舟載妓漾漣漪。晚來停棹何辺好。神女祠前月似眉。

*《松》（8）。結句「神女祠前月如眉」。／《山・松》【5】。缺あり。

【3】月色滿城風露滋。踏歌声裏夜闌時。古詞旧曲嫌陳腐。争唱安来新竹枝。

*《松》（10）。承句「踏歌声湧夜闌時」。転句「尋常詞曲厭陳腐」／《山・松》【18】
転句「尋常詞曲厭陳腐」。

【4】雨絲風片暗江城。滑滑泥途不可行。知是辺村先有雪。街頭处处売山鯨。

*《松》（19）。／《山・松》（21）転句「知是遠村先有雪」。自注あり。

篠田謙治による剽窃が疑われるところであるが、どうも、この『琴屋詩存』は琴屋の手稿本に依ったのではなく、『山陰新聞』等の村上琴屋名の作品を集めたものらしい。『琴屋詩存』の例言にもいう。

一、琴屋翁以詩為命。所作頗多。定有手定稿本。而不知所在。今由新紙雜誌所載。並所遺手箋等。得千有余首。約選其半。顧遺珠尚多。期他日之完璧。

それでは、新聞編集時の間違いかとも思い、『山陰新聞』の日付が後の部分を調べたが、訂正記事等は発見できなかった。また、*校で書いたように、『山陰新聞』と字句が違うところがある。村上琴屋が自分の作品として、手を加えた遺稿があったともとれそうである。結局、真相は謎のままだが、詩の内容をみると、外来の人が、松江の風俗を面白がる気味があって、松江育ちの村上琴屋作にはふさわしくないようであるし、そもそも、このような遊びの文学を盗作して、何の意味があろう。今のところ、私は、『松江竹枝』所収の詩すべてが篠田謙治の真作だと信じている。

なお、『山陰新聞』の「松江竹枝」は、マイクロフィルムでは、紙面の端が欠損している部分（2首分と思われる。そうであれば、題下に「二十三首」というのに合う）がある。私はその部分【2】【3】を、*校のように『松江竹枝』の（2）（3）であると推定した。前後の【1】、【4】が、『松江竹枝』の（1）、（4）と一致しており、間に（2）（3）と順に並ぶのが妥当である。『琴屋詩存』「松江四時雜詞」の【1】（松江竹枝の（2））が、『山陰新聞』から採ったとすれば、欠損部分以外には見えないので、《山・松》の（2）（3）のどちらかになるはず。《山・松》は、四季の順番に並んでおり、春の詩が（2）（3）に来るのが妥当。以上のような理由によってである。

機会があれば、国会図書館所蔵の原本を調査し、更に全国のどこかに欠損のない『山陰新聞』が残っていないか調べたい。

次は「綿美竹枝」の題のもの。「綿美」は、松江の遊廓があった「和多見」地域。当て字であろう。10首のうち、8首が『松江竹枝』と重なる。自序、跋もあって興味深い。

B 1886（明治19）年3月7日 『山陰新聞』

綿美竹枝 精軒戲草 （略称 《山・綿》）

松江花界之繁華。比之昔日凋零極矣。而日夜閑散束手者。居十中六七。其稀招而遊此者何人。曰土人也。曰羈客也。而羈客居多。就中東国之者多矣。而其妓籍亦多係于大阪之産者。以茲。衣帶鬢髻。頗模擬阪府。然而情妓概兼声妓。歌舞則嫺雅。天性皆婉柔。不似東方有意氣也。今有咏妓之詩数首。以供衆諸一粲。拙劣請幸恕焉。

- 【1】 桑滄之變獨空傷。只喜雙親猶在堂。至孝佳人天未幸。七年流落滯斯鄉。（力蝶）
* 《松》（45）。「力蝶」を「力長」に作り、標題としている。
- 【2】 繡閣詠諧逸興多。唱來一曲八杉歌。芳心持贈画花扇。不是情人可奈何。（花扇）
* 《松》（32）。
- 【3】 皓齒明眸傷此身。落花流水奈前因。素絲一縷長千尺。繫得橋南橋北人。（素絲）（素一作白）
* 《松》（47）。（素一作白）なし。
- 【4】 夢遶光明南浦濱。漂萍身似一紅裙。平生温厚即天質。艷美依稀見此（一作若）君（若君）
* 《松》なし。／若君は《莊一》にも見える。
- 【5】 唱出嬌喉艶冶歌。評声品色果如何。名呼好好連呼耳。司馬先生到處多。（与志）
* 《松》（27）。「与志」は「好」に作り、標題としている。
- 【6】 数行紅淚是斯文。一片丹心初見君。今夜情郎猶未到。花傷風雨月傷雲。（初君）
* 《松》（34）。起句「千紅万紫本紛々」。承句「一片芳心初見君」。
- 【7】 越王樓閣唱吳謳。声不九臯弄玉喉。一自此君留此地。人間此處小楊州。（鶴子）
* 《松》（46）。承句「声似九臯弄玉喉」。
- 【8】 昨夜海棠微雨過。一顰一笑意如何。沈淪情況君休説。自古佳人薄命多。（愛次）
* 《松》（29）。／《莊二》に相寿という妓女を詠む。同一人物か。
- 【9】 枉唱安來謠冶歌。嫣然嬌笑奈愁何。松江慣見浪華月。眼滿山河双淚多。（力彌）
* 《松》なし。／力彌は《莊二》にも見える。
- 【10】 夜夜劉郎踏雪來。狹斜場枕碧江隈。清香艷色有人識。臘裏占春花是梅。（花梅）
* 《松》（30）。／花梅は《莊一》にも見える。

不粹道士云、予素不解花柳（柳）情事。況於各妓之伎倆与醜美乎。蓋有如精軒氏才筆、可始使佳人重於九鼎太呂矣。唯為精軒氏所恨、在咏愛的結一句。自古佳人薄命多。然一顰一笑曲説沈淪情況者、未必可尽信焉。精軒氏莫或陷其術中乎。呵々。

最後に、「竹枝」という題のもの。14首中5首が『松江竹枝』と重なる。「精軒」の号をもとに「夢醒軒」（音読みで、むせいけん）の戲号を用いた。序に「予は松江に在りて、三年茲に未だ花柳の巷を踐まず」とある。『官員録』によれば実際は三年に満たないが、【1】すなわち『松江竹枝』(11)に「三年此の地に中秋に値う」というのも、妓女ではなく、自分自身の境遇だったのである。

C 1986（明治19）年3月27日 『山陰新聞』

竹枝 夢醒軒 *略称 《山・竹》

予在松江。三年于茲未踐花柳巷。曩咏綿美竹枝。意不至筆亦不從矣。如何善画其情狀。全篇。或因稗史。或因小説。想像其妓者焉。要不免有盲者窺牆之謗也矣。

【1】愁思引客倚青樓。月冷庭梧暗露浮。拳首悽然低首泣。三年此地值中秋。

*《松》(11)。

【2】樓頭分袂意悽然。月白遠山欲曙天。杜宇一声鳴度處。君今正到大橋邊。「君一作郎」

自註。昔東国有妓。贈情郎俳句曰。喜美波伊摩、巨満加多阿他理、保都々岐寸、此吟一時、膾炙于人口。

【3】家貧由来雖沈淪。未許黃金贖此身。一片丹心若相訪。狹斜豈莫有情人。

【4】社日櫻花簇綺羅。十神山上景光多。青樓置酒能留客。例唱安來謡冶歌。

*《松》(6)。

【5】累々紅燈祭碧樓。繁絃嬌曲曲江頭。風清壳布祠前月。不照当年妾暗愁。

【6】吳船越舶去來頻。恨殺巫山艷夢新。今夜与君睡閨裏。不知明日契何人。

【7】空值佳辰獨斷腸。重陽九月菊花黃。愁思枉酌樓頭酒。泣自異鄉望故鄉。

【8】辛苦三年何所為。風光節物獨空悲。佳人自古數奇事。此恨鶯花知不知。

【9】傷郎至竟憶郎情。只願莫違三世盟。私語未終天欲曉。生憎善導寺鐘聲。

*《松》(25)。「善導寺、松江寺院之名」の自注有り。

【10】一柯清影一條流。水上浮沈伴白鷗。父子三年未相見。數行紅淚落難留。

【11】幾開鸞鏡照新粧。雲鬢梳來只自傷。皓齒明眸為誰艷。空教紅淚濕黃裳。

【12】富子

此地數年猶未歸。宵々紅淚漂閨幃。憐君青女繡秋手。好為阿郎縫錦衣。

富子。浪花之産。幼來松江。夙有才色之名。傍能裁縫。轉結故及。

*《松》(43)。自注もほぼ同じ。

【13】朝霧

三生石上結良縁。互約後宵契已堅。咫尺情郎看不見。朦朧朝霧罩簾前。

*《松》(31)。自注「朝霧時病眼、故及」／朝霧は《莊二》にも見える。

【14】小芳野

紅唇一咲百媚生。吉士懷春豈耐情。天性艷姿又清質。呼為芳野不差名。

5. 篠田謙治の他の作品（『山陰新聞』所収漢詩）

篠田謙治は、竹枝以外の普通の詩も数多くのこしており、こちらは外聞を憚るところがないのか、姓、さらに名を公表している。

●1885（明治18）年12月10日 『山陰新聞』雑記

弁慶 篠田精軒

背後鋸槌何所用。不如單策脫危艱。還因淨業当年力。打破人間生死關。

木曾義仲

誰道將相無常種。兒戲平生事射騎。夙看蛟龍捲風雲。平安城裏樹白幟。物情恂々奈難治。將帥又非宗廟器。人笑楚人沐猴冠。前狼失穴雖可喜。後虎挾乙我豈安。旁觀無乃襲下莊之故智。一朝壇浦又粟津。鷗蟬兩遺漁人利。君不聞吳蜀特角苦當塗。鼎足之業亦不迂。蘇山髣髴小劍閣。將軍胡不早負嵎。

精軒が篠田謙治であることがわかったのは、次の詩によってであった。

●1885（明治18）年12月26日『山陰新聞』

寄勝田睡僊 精軒 篠田謙治

奇癖同緣訂會盟。忘形初不問枯榮。雄渾笑我文章拙。豐艷喜君詩調正。紅葉風輕孤蝶影。綠陰昼靜晚鶯聲。看他世道論心者。翻手涼炎何呈評。

寄河野苔洲

禪心如月皎無瑕。笑看榮枯世上花。不染錦城歌吹海。山陰歸臥一袈裟。

寄高橋泥舟 氏住東京牛込

迅颺振古林。繁霜摧籬菊。歲時看崢嶸。何以慰幽獨。可人在平生。一見情已熟。樓指當時先。居士最奇卓。心如古逸民。仙書享清福。鎗術輝日東。書法普流俗。遠近頗稱之。謝官不求祿。聞名心已慕。豈凶來吾屋。嗟予在塵羈。校書直芸局。文章鳳已題。更見一尊醪。傾之如失偶。廻傷車輾轉。爾來類相違。有若寒與燠。清緣已如許。乖斥一何速。離合固有常。眉尖動易蹙。世間為好事。須先忍蹉跎。況是文字交。不在疎與數。万里如比隣。貂尾狗可紉。而今寄詩篇。莫使音塵邈。

●1886（明治19）年1月10日『山陰新聞』

丙戌元旦作寄 篠田精軒草

淞南松田君

和風吹徹旭旗斜。好是春光好物華。山帶浮嵐生暖翠。梅纏新雪呈嬌花。佩環聲向城闈響。擊壤歌盈閭巷譁。更有一峯稱仙嶽。「大山在伯耆」千秋秀色屬誰家。

瑞氣氤氳麗彩霞。繁華亦不異京華。江山有約先呈色。草木無情猶孕花。紫陌頌歌隨處起。朱門車馬為春譁。和風吹遍文明化。万国而今同一家。

鶴契千年「千家氏兼題」

松竹滿門累葉鮮。「千家氏累世長壽故及」仙禽高舞龜山巔。「龜山地名」蓬萊寄作君家物。又是春風小洞天。

寄藤祝

織綺繡霞裁綴工。年々引蔓豈終窮。長條千尺出雲樹。窈窕繁華紫半空。

松江雜詩

京坂秋風雲石春。青年空帶客衣塵。歸來只合掃墳墓。悔我東西南北人。

雲卷復舒屢變姿。山開還隱態何奇。吟哦未得上乘作。過眼雲山皆我詩。「近時有過眼錄自纂」

●1886（明治19）年2月9日『山陰新聞』

（飯島半村「將赴任広瀬留別不休吟社諸彦」の詩に続いて、松田淞南以下4名が「送半村兄赴任広瀬」を作り、山本白水以下4名が「送半村飯島君赴任広瀬次其留別之韻」を作った。後者に篠田謙治が名を連ねて）

同 篠田 精軒

旅装行看景物加。馬蹄香雪富田花。一簇紅雲低不墮。春風吹斷月山霞。

●1886（明治19）年3月23日 『山陰新聞』

春声 精軒 篠田謙治

欲將律呂試朱絲。已聽東風動綠枝。細雨簾纖芳夢靜。一檐滴瀝午陰遲。梅花落月樓頭笛。楊柳清歌席上詩。誰識狂生多感觸。滿山啼鳥倒尊時。

春色

遲々麗景滿寰區。江碧山青似画図。日暖殘烟浮遠渚。風和香雨染平蕪。烟霞粧出笙歌市。錦繡織成花柳衢。直到点紅間万綠。使人随处燃金鬚。

春夜睡覺微暖枕上口占得韻東

雪後寒還退。也知酒力融。爐薰吹睡夢。檐溜靜簾櫳。梅影初春月。鐘聲半夜風。清香何処至。瓶有玉玲瓏。

篠田謙治の詩で、『山陰新聞』に載った、最後のものが以下である。題や序によれば、1886（明治19丙戌）年4月28日（四月念八日）に、苧坊（今の苧町（おまち）？現松江市役所の附近）を立ち、その日の夕方に玉造温泉に到着。それから、掛合町を訪れている。その後、広島に抜けて、故郷の東京に向かったのであろうか。

●1886（明治19）年5月6日 『山陰新聞』

留別松江諸子 篠田精軒 草

客中送客淚痕多。却唱陽關三疊歌。尤是今朝留別処。綈袍恋々奈君何。
松江此去恨何頻。春過青山碧水濱。千里從今張翰興。宵々心夢到鱸莼。
晚桜隔水映斜暉。一片丹心憶帝畿。父子三年不相見。恨遲鴻雁故鄉歸。
流水落花三餞春。陽關一曲賦詩頻。離愁如此君看取。送別人為留別人
橋畔何人折贈楊。離愁心緒綫來長。寄言青帝笑吾否。今日伴春歸故鄉。

丙戌四月念八日。亭午發島根郡苧坊。未時早已至意宇郡玉造。浴後起而倚欄干。客樓風物又不可言也。立賦詩數首以附稿于督郵。

人道靈泉功驗多。硫烟高捲玉山阿。神医難療藥難治。名利場中幾個痾。
半日来遊積翠間。天然風物小仙寰。無人來說風塵事。臥看飛青一髮山。
峻峯突兀水潺湲。日落層嵐積翠間。秃筆一枝在吾手。写來米点幾重山。

松江留別即事

落花流水去難留。泣送東歸万里舟。橋畔柳楊垂不語。朝風暮雨管離愁。「万里別一葉」

飯石郡掛合旅亭作

綠酒紅燈亦一時。昨非今是覺何遲。春風隴月客中景。付与筆奴皆入詩。
長亭短駟弄吟毫。自覺當時詩氣豪。一旦書生為稅吏。割鷄何必用牛刀。

觀落花有感

昨日滿枝花。今朝滿庭雪。清姿雖可賞。其奈過芳節。豈無茵溷殊。終然期煙滅。所以超脫人。盤樂在巖穴。

紫牡丹

人間応比紫漸郎。文彩風流庄衆芳。宸苑祥靈逢李白。長城春色笑王嬙。好呼瑞硯描長艷。莫使蘭芽妬国香。未信姚黄冠陸譜。幾篇評品費詞章。「自註陸務牡丹譜以姚黄為首」
「一旦書生税吏と為る。鶏を割く何ぞ必ずしも牛刀を用いん」。まだ若いとはいえ、異郷で十七等相当という最下級の収税吏にしかねなかつた、篠田謙治の失意、後悔が感じられる。この前後の時期に官を棄てる決心をしたのではないだろうか。

6. 篠田謙治の和歌

先に述べたように篠田謙治は、漢詩人ではなく、歌人として知られていた人であり、『明治・大正・昭和の読売新聞（読売新聞社CD-ROM）』によって、「篠田謙治」名を検索したところ、『読売新聞』の文芸を収めた付録版に彼の歌数首を見出した。この年、鈴木重嶺が事故により死亡するので、どうも彼が師の重嶺のかわりに、歌会を主催し、読売新聞に自作を含めて、選んだ歌を載せたい。「新題」と銘打つように、明治開化の舶来の珍奇なものを題材にした歌が多い。以下、検索結果を引くが、読みやすいように原文のレイアウトや句読点振り仮名等を、改めたり省略したりしている。小竹園（しょうちくえん）は、篠田謙治の歌人としての雅号。

●1898（明治31）年10月24日 『読売新聞』 附録2面

小竹園月並新題競点 会主 篠田謙治 鈴木重嶺翁撰

人造麝香 篠田謙治

ひらけゆく人の工（たく）みの現れて 高き匂ひぞ世に薫りけれ

●1898（明治31）年11月14日 『読売新聞』 附録1面

小竹園月並新題競点 会主 篠田謙治 鈴木重嶺翁選

人造麝香 篠田謙治

世の人の造る薫りも高かるを 獣にのみと思ひけるかな

●1898（明治31）年11月28日 『読売新聞』 附録1面

小竹園新題月並競点 会主 篠田謙治 選者 江刺恒久君 先光清風君

蓄音機 篠田謙治

亡（なき）人のこはねを今も聞得（ききう）るは、これの器のあれば也けり。

●1899（明治32）年2月20日 『読売新聞』 附録1面

小竹園新題競点 会主 篠田謙治 久我既醉公選

◎開業提灯 篠田謙治

商業（なりはひ）のいや栄ゆべき君が代の 光を仰ぐ千々のともし火

●1899（明治32）年3月27日 『読売新聞』 附録3面

小竹園新題競点 会主 篠田謙治

小出榮大人選 ○裸体画 ●篠田謙治

麗しき膚（はだへ）を見する写し絵に 顔をそむくる人も有けり

久我既醉選 ○市区改正 ●篠田謙治

市町（いちまち）の大路も今はあらたまり 世は便（たより）好（よく）ならんとすらん

●1899（明治32）年7月3日 『読売新聞』 附録2面

小竹園月次歌会兼題

夜郭公（よるのほととぎす） 篠田謙治

大方の人は眠（ねむり）し小夜中に 我独聞（われひとりきく）初ほととぎす

7. 『山陰新聞』所収のその他の作者による『松江竹枝』及び妓女や遊廓を詠った作品

本題から外れるが、当時の『山陰新聞』を閲すると、篠田謙治が松江に来る少し前頃から、松江の妓楼を詠む竹枝詞やその亜流が盛んに載り始める。この気風が、篠田謙治に刺激を与えたかもしれない。今後、これらの詩の作者達の履歴や人間関係を調べたい。

●1884（明治17）年5月25日 『山陰新聞』 雑記

松江竹枝詞 佐川半醒

李雪桜雲湾又湾。春人遂勝競来還。菅公祠外轟名者。米鶴絃声歌吉顔。

*「歌吉」は《松》(41)も詠む。《松》(33)に玉鶴を詠むが、或いは米鶴と同一人物か。

●1884（明治17）年7月8日 『山陰新聞』

松江雑詩 山下楓菴

長風半日作良媒。帆影高低映水回。売布祠辺楼上下。絃歌無曲不安来。

誰賃軽車傍岸馳。楼船笙響炙鱸時。豈祇香味誘紅客。別有招燈照雪兒。

●1884（明治17）年7月30日 『山陰新聞』

松江竹枝 高橋春流

寺門晴日映紅裙。争賽観音兒女群。別有行人買花至。竹瓶分挿拜邱墳。 春

睡仙云、穩雅似遠思楼風調。

北溟殊夥夜来漁。正是梅天雨霽餘。日氣漸腥街陌午。家々軒牖晒鱸魚。 夏

睡仙云、新奇。

山下楓菴云、実境。

碧雲湖畔不勝秋。湖口網鱸箇々舟。此境明朝成各夢。君帰隠島妾因州。 秋

睡仙云、風俗如見。

冬来秋去幾経句。鱸膾回頭跡已陳。十六島辺霜始重。生薄入市一番新。 冬

睡仙云、老練似星巖翁。

楓菴云、陳字新字呼応。敬々服々。

●1884（明治17）年8月1日 『山陰新聞』

松江竹枝 山下楓菴

氷魚三寸減春寒。処々青帘映碧灘。菅田伴去酔花日。也約蜻洲観牡丹。 春

高橋春流云、僕意中所有、君先著鞭。

誰載芳醇賃小綸。黄紘細々隔炎塵。菅公祠畔抛珠客。多是湖心酔後人。 夏

春流云、実況。

衣香扇影趁秋暄。紅隊成群城外村。連理神符誰不信。癡情争賽八重垣。 秋

春流云、好竹枝。

起把銀釵指大仙。将兼新雪競嬋妍。却呈嬌靨誇吾客。知否雲州小岳蓮。 冬

春流云、鴨東四時雜詞中佳境。

以下の漢詩の二群は、莊堅溪なる人が松江の妓女達を詠んだものだが、幾人かの妓女は、松江竹枝が取り上げた妓女と重なっている。妓女名のあとに、*で『松江竹枝』等にも登場することを示した。この漢詩は訓点が付してあり、日本語として読むことを期待しているようなので、書き下し文に改めた。原文の通りではなく、読みやすいように、句読点を増改し、送りがなを現今通用のものに変え、現代仮名遣いを用いた。「不」等、訓読で削った字及び原文についている振り仮名は（ ）内に示した。

●1884（明治17）年5月23日『山陰新聞』 雑記 *略称：《莊一》

薄情士人曰く、世に莊堅溪なる多情士有り。面白詩十首を投げ被る。即ち当地之花街和多見町娼妓を詠ずる之詩也。執りて之を見る、総て是れ過称之評を免れ不る如し。然れども狹隘なる田舎之花街中に於いて其の粹を抜き、而して自惚に之を称えんと欲するは、先ず此様也者乎（こんなものか）。余也実況に暗しと雖も、請う聊か之を評せん。其の詩体字句の如きは、関する所に非ず。唯だ之を娼妓録に照らし、以て戯れに評する焉耳。然れ雖も世の多情青年輩為に其詩其評之当否を判ぜん。父母の目を盗み、金筆筒を空しうし、或いは狐巽に罹り、以て自惚放蕩之迷界に陥る有らば、余誠に迷惑に思わ不るを得ず（不）。青年輩請う逆上せず（不）に翫味せよ焉。呵々。

題詞

江上別に開く桃李の園。四時爛漫として百花繁し。知る可し彩筆題品に慵きを。艶紫嬌紅蝶魂を迷はす。

政花

沼中澤裡一枝の花。今政に全盛狭斜に冠たり。李に非ず桃に非ず能く語を解す。知らず（不）飛散して誰が家に落つるを。

政花之顔、狐に類する所有りと雖も、能く語を解す之三字は或いは適當ならん。其の結句誰が家に落つるの三字に至っては、余は断じて莊堅溪其の人の如き多情士の家に落ちず（不）して、将た誰が家に落ちん乎と評せん耳。請う腰を抜く勿れ。○自惚痴人曰く、艶政花の如きは、即ち花柳場中蓋し二三のみならん矣。○又曰く、今字の下、政字を用いし者其の名を挿みし之意乎。如何。

糸治 *《松》(38) は絲兒を詠む。同一人物か。

好静幽閑芳秋を占む。令声美誉江頭に満つ。淡粧濃抹春風暖かに。軟語温存情流れんと欲す。閨中之情は則ち或いは流れん矣。其の好静幽閑に至っては、余則ち知らざる也。却って知る、酔いに乗じて互いに勿来之好物なるを。○自惚痴人曰く、薄情子の言、評し得て而して頗る妙。子曰、予は実況に暗しと。其れ果して信耶。何ぞ其の実情を摘する之巧みなる乎（や）。

若君 *《山・綿》【4】も若君を詠む。

須く擅にすべし花中君子の名。群芳叢裡独り分明。天然韶秀芙蓉の態。風致亭々として越様に清し。

奇麗は即ち奇麗、風致は即ち風致なりと雖も、目少しく奇、此の詩を見れば蓋し慚じん矣。○自惚痴人曰く、転結稍や過賛に似たりと雖も、而も能く其の人を写し得たり。薄情子の評、

或いは苛酷に失せざる乎。若し予をして之を評せ使めば、則ち曰わん。美に非ず醜に非ず。寧ろ美と為すを妨げず。

愛吉 *《松》(42) も愛吉を詠む。

海棠姿は艶なり雨過ぐる天。籬菊気は傲る霜下る前。又是名花傾国の色。香を趁う痴蝶独り憐むに堪えたり。

眉の地蔵なるは是海棠乎、籬菊乎。目尻の(之)垂るるは是憐むに堪たり。畢竟痴蝶罨に罹って狂す。○自惚痴人曰く、籬菊気は傲るは、則ち然り矣。呼んで海棠と傲すは則ち未だ可ならず矣。

花梅 *《松》(30)、《山・綿》【10】も花梅を詠む。

烟花隊裏幾星霜。愛す可し此君老いて香を帯ぶ。狂蝶無情何ぞ一に甚しき。梅を遣し竹を移す恨み殊に長し。

狂蝶無情乎、将た狂蝶を無情たら使むる乎。恨み殊に千代竹に向って長し。○自惚痴人曰く、梅を惜む之余怨、颯って竹を恨む之の思いと為る。是之を迷執の致す所と謂ふ可き耳。○又曰く、承句、老いて香を帯ぶとは(者)、如何。借問す余香何れの処に存するぞ。

杜若

杜若花は開く弱柳の傍。雨に折られ風に摧かれて幾時か長き。濃青淡紫残装の態。春尽きて猶餘す数日の芳。

此の詩随分写し得たり。若し承句を変じて雨に折れ風に摧かれて片足短しと為さば、一層實際を写さん。○自惚痴人曰く、予最も此の詩の辞巧みにして(而)事真なるを愛す。○又曰く、薄情子。善罵。然りと雖も、之を善罵と謂わんより、寧ろ悪罵と謂わん焉。予甚だ這樣的罵詈を喜まず。

嘉代

一看すれば艶を覚え再看すれば清し。雲態霞容画けども成らず。苟も嬌葩妖草の所に在らしめば。牡丹何ぞ花王と僭するを得ん。

嘉代唯愛す可しと云う可き耳。思うに此詩の如きは孤燈影暗きの下痴話多情之間に(於)成る者乎。○自惚痴人曰く、其の面貌風采、頗る風韻有り。而して鄙俗ならず(不)。唯其の心術は吾未だ知らず焉。本詩の如きは、筆妙と雖も過賛過称実に甚しきを奈んせん。

小花

解語園中第一の花。桃嬌杏艶又何ぞ加えん。倡条冶葉傾城の色。折り得たる人は忘る婦路の餘かなるを。

余也未だ小花解語の園に遊ばずと雖も、蓋し花を楽しむに非ず。唯だ其れ花中之蕊を弄するに過ぎざる可き乎。○自惚痴人曰く、第一の花とは、果して何を以て之を言う。千百遊郎中、堅溪子を除き、果して此言を為す者有る邪。

小勝

清歌自ら比す哲生が音。妙調独り擬す伯氏の琴。一関す盛筵稠坐の裡。諸人聴き得て襟を披かんと欲す。

小勝之長所絃歌に在り。此詩過ぐると雖も長所を失わず。○自惚痴人曰く、薄情子の評言先

ず我が心を獲たり矣。

●1884（明治17）年7月2日『山陰新聞』 *略称：《莊二》

湍涯芳譜拾遺 莊堅溪戯

向者、余病窓之暇、花柳之数枝を摘し、戯れに詩譜を作る。一嘘以て貴社に寄す。偶ま一友人来り責めて曰く、子其れ新聞紙を以て淫を導き姦を誨うる之具と為す乎。何故に淫詞鄭声以て之を災し之を浼すを為す也（や）。余対い曰く、否。余亦た嘗て嘆ず、世人多く好んで彼の淫靡なる小説を読むも、而も此の貴重なる新聞を読まざるを。噫、是れ所謂韶虞には則ち眠りて而聴かず（不）。鄭衛には則ち倦むを知らざる者に非ず乎。意謂ふに其の病既に肝膈に在り。此れ姑息の法の得て（而）治する所に非ざる也。其の好む所に随いて（而）此を導くに如かず（不）。是余之前作有る所以也。余聞く、幼児を教うる者、先ず図画を示し、其の歓心を邀え、然る後其の事実を授くるを要すと。是れ所謂其の好む所に随いて而之を導く者也。又聞く、医家先ず劇薬を以て其の病勢を殺し、然る後寛和剤を以て是を補調する有り。是れ則ち所謂姑息法に非ざる也。余窃かに二者に（於）取る有り。蓋し余が詩、図画也、劇薬也。然りと雖も、安くんぞ其の向学之心を發し、全治之功を奏せざるを知らん哉。子其れ之を諒せよ。彼諾して而して去る。記し以て此の篇之題詞に換うと爾云う。

勝寿

枯葉萎花已に看るに懶し。此の君恰も好し凋残に換うるに。翠眉紅臉春風暖かに。雲鬢霧鬢秋色寒し。

浅桐（朝霧、浅桐、国訓相通ず）

明石湾頭曉景奇なり。歌仙曾て又東西を失す。憐れむに堪ゆ世上津を問う客。朝霧空濛として思い転た迷う。 *《松》(31)、《山・竹》【13】も朝霧を詠む。

初君（横面自り之を視れば、前額突出して看るに堪えず（不））

影を捉う画中の一美人。前身応に是れ巫山の神なるべし。相い逢い相い見れば顔色無し。笑うに堪えたり写真猶真ならず（不）。 *《松》(34)、《山・綿》【6】も初君を詠む。

力彌（向に杵築に在り。春鶴と号す。専ら藝を売る。今色も亦売る）

曾て華表に臨む綵雲の中。一たび遼東を去りて意気空し。鶴を煮琴を焚く殊に嘆ず可し。仙禽何ぞ耐えん跋扈の風。 *《山・綿》【9】も力彌を詠む。

小染（嘗て若勇と名づく。病瘳えて、更に籍を掲げ、今の名に改む）

子弟に簾を隔てて看せ教むる莫かれ。定めて是れ蕩鎔せん鉄石の肝。已に有り去来眉意の巧みなる。更に堪えん盼兮眼波の寒きに。

八百吉（数年前松千代と号す。一旦良に従い落籍す。今者父の不慈に由りて、更に苦海に沈む）

狂花底に事ぞ旧園に発く。芬芳復往日の繁き無し。其の名已に見る二分の減。那ぞ得ん十分春色の存するを。

小千代

臭無く香無きは海棠に似たり。濃ならず（不）艶ならざるは花王に遜る。論ずる莫かれ濃艶と香臭と（兼）を。彼に宜しく此に宜しき独り擅長。

市由 *《松》(37)は市吉(イチヨシ)を詠む。同一人物か。
十歳身を沈む苦海の流。欄に憑り日夕帰舟を恨む。伝え聞く落籍期殊に近きを。夢裡数え来らん八月の秋。

相寿 *《松》(29)、《山・綿》【8】に愛次(アイジ)を詠む。同一人物か。
雲態花容新月の眉。妖嬈笑いを含みて堂に上る時。破瓜十五嬋娟の女。惱殺す紅顔の輕薄兒。

古与(知らず此の人今猶籍中に在りや否やを)
艶歌清唱三絃に倚る。杳渺宛転として四筵を驚かす。若し孔丘をして一曲を聞か遣めば、莞爾として笑いを含みて東天に向かわん。

8.まとめ 篠田謙治年譜

篠田謙治の簡単な年譜を附して、これまでわかったことのまとめにかえたい。

1864(元治1)

1月15日 江戸に生まれる。(『明治人名辞典Ⅱ』)

<幼より芳野金陵、阪谷朗廬に就きて、漢学を学び、又和学を修む。其他法律経済の二科を講究し、頗る造詣する所あり>(『明治人名辞典Ⅱ』)

1882(明治15)頃

歳18、職を大蔵省に奉じ、編輯に従事。(『明治人名辞典Ⅱ』)

1884(明治17)

8月 島根県収税属十七等官相当に赴任か。(『嶋根県職員録』(明治17年8月改正)、10月の『官員録』より篠田謙治の名あり)

1885(明治18)『山陰新聞』上に漢詩を発表し始める。

3月17日 「松江竹枝」(村上琴屋名)

12月10日 「弁慶」「木曾義仲」(篠田精軒)

12月26日 「寄勝田睡僊」「寄河野苔洲」「寄高橋泥舟」(精軒 篠田謙治)

1886(明治19)

1月10日 「丙戌元旦作寄」の標題で、「淞南松田君」「鶴契千年」「寄藤祝」「松江雜詩」(篠田精軒)

2月9日 「送半村兄赴任広瀬」(篠田精軒)

3月7日 「綿美竹枝」(精軒)

3月23日 「春声」「春色」「春夜睡覺微暖枕上口占得韻東」(精軒 篠田謙治)

3月27日 「竹枝」(夢醒軒)

4月28日 松江を発つ。同日玉造温泉。更に掛合へ。(5月6日発表の詩による)

5月6日 「留別松江諸子」「丙戌四月念八日……」「松江留別即事」「飯石郡掛合旅亭作」「観落花有感」「紫牡丹」(篠田精軒)

5月 この月まで『官員録』「島根県・収税属・十七等官相当」に名あり

1888(明治21)

12月29日 大森惟中『松江竹枝』に批点を加える。跋はこの日付。

<この後の動向未調査。鈴木重嶺門下として活動していたものと思われる>

1898（明治31）『読売新聞』で和歌欄の選者、作者として登場。鈴木重嶺の死と関係があるか。

10月24日 「人造麝香」

11月14日 「人造麝香」

11月26日 鈴木重嶺没

11月28日 「蓄音機」

12月18日 『故鈴木重嶺翁 追悼歌会供薦歌』に参加。

1899（明治32）

2月20日 「開業提灯」

3月27日 「裸体画」「市区改正」

7月3日 「夜郭公」

1900（明治33）『日本現今人名辞典』に載せられる。

<この後の動向未調査。没年不明>

今後も、篠田謙治の事跡や作品を追いかけて、上記年譜の空白部分を埋めてゆきたい。

更には、明治初期の『山陰新聞』所載の漢詩をデータベース化し、詩人の事跡や人間関係を明らかにして、明治初期の山陰漢詩壇の全体像をつかんでいきたいと考えている。

【注】

本論文は、鳥根大学法文学部山陰研究センター、2007-8年度 山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト(0701) 代表：蘆田耕一（法文学部教授：国文学）および2008年度 歴史・文化資源を活かした「地域まるごとミュージアム」化実践プロジェクト(0812) 代表：会下和宏 田中則雄 竹永三男による成果の一部である。

(注1) <http://www.ksskg.com/suzuki/itsuwa.html>

(注2) <http://www.ksskg.com/suzuki/index.html>

(注3) <http://www.ksskg.com/suzuki/sui5.html>

On Shinoda Kenji, the author of Matsue Chikushi.

YOGI Junichi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

Keywords : Matsue Chikushi, SHINODA Kenji, Seiken, Yukaku, early Meiji Era

[Abstract]

Matsue Chikushi (handwritten) is a book of Kanshi (poem written by Chinese characters) about Yukaku (the red-light district) in Matsue City in early Meiji Era. The author Seiken had been unidentified. I found the same poems in San-in Shimbun, the newspaper which was then issued in Matsue City, and identified Seiken as Shinoda Kenji, who was a lower-ranking official transferred to Matsue City. Later he became a comparatively famous Waka (Japanese traditional short poems) poet. I compared the poems appeared in Matsue Chikushi with those in San-in Shimbun, collected Shinoda's other poems and traced a part of his personal history.

